

## 第5章 政治的集団行動の社会範疇とその解釈について — 1998年ブリーチャー国会議員選の分析

渡邊 日日

### 1. 政治的行動と社会人類学

近代的諸制度に於ける人間行動については、たいていの場合、二つの分析規準が参照されてきた。ある行動に対して合理性（近代）を見いだす規準と非合理性（前近代）を見いだす規準がそれである。話を政治的行動に限定して述べれば、国民国家に於ける普通国政選挙は参加者に利害関心の合理的計算を促す近代的所産の一つであり、対して、血縁や部族間の連帯を重視したり、ポトラッチなどの儀礼的脈絡のなかで権力が獲得される政治社会は、前近代の遺制であり非合理的なものであるとされた。そして、この二分法は、学問的知識の布置にも当てはまり、前者は政治学、後者は文化・社会人類学の領域とされた。

もちろん如上の二分法は、1960年代の近代化論の一変種であり、その後批判されることとなった。近代化によって部族的或いはエスニックな紐帯が弛緩し、近代的な社会統合（国民統合）が進行するという近代化論への批判の方法には、主として、合理的と一般的に想定されている制度や組織の原理に、それとは別次元の行動機制が作用しているとする視座と、一見前近代的と捉えられがちな集合論理は実のところ、その環境となっている近代の所産であるとする視座があった。

前者の視座を代表するのが、例えば **Abner Cohen** であった。彼は社会人類学の理論的課題として二つの分野を想定し、一つを政治や経済の権力といった「政治的なるもの」、もう一つを親族や儀礼といった「象徴的なもの」と呼んで、如何なる社会も両者の連続線のなかに存在するという「二次元的人間」の理解像を示した[1974b]<sup>1</sup>。Cohenの議論には、利害調整にあたって集団統合のインフォーマルな実現態こそがエスニシティであると主張する強みがあり[Cohen, 1974a, pp. xvii ff.]、部族的でエスニックな政治社会運動を分析の枠に入れる効果があった。そして、後者の視座を代表したのが、**Morton Fried** であった。彼は部族を取り上げ、この概念の近代性を指摘した。即ち、「国家が部族から進化したと言うより、国家が部族を創出した」のであり、「部族とは、より単純に組織された社会の中に、相対的により高度に組織された社会が出現したときに引き起こされる過程の産物である」と喝破した[Fried, 1975, p. 13; 1967, p. 170]。所謂「再部族化」の現象は、彼によると、部族から国家へ、そして昔の部族への回帰という順序ではなく、近代国家という多層化・複雑化した

---

<sup>1</sup> この立場からすると、政治学は「政治的なるもの」の次元しか扱わないゆえ「一次元的」とされる[Cohen, 1969, p. 231]。

社会のなかでの新たな統合単位の画定に他ならない。Fried の視座は、植民地研究や脱本質主義（儀礼や伝統の創出論）といった後の流れを、「非合理的・前近代的なもの自体の近代性」という議論を蝶番に、準備していたことになる。

近代的政治制度に於ける人類学の研究動向は、先に見た二分法に対してこの二つの批判の方法を持続させてきたように思われる[cf. Lewellen,1992, ch.11]。本論文は、こうした批判の効力を認めつつも、政治人類学のなかで見落とされてきた側面を指摘するものである。結論を先取りして言うと、それは、行為のレベルとその説明のレベルとが必ずしも一致せず、場合によっては住民或いは当事者自身の説明や解釈に登場する用語法が研究者にとっては「古い」と映り、結果としてその政治アリーナがアナクロニズムや伝統主義として規定されてしまう、という視点である。具体的に私はここで、ロシア連邦ブリヤート共和国（ブリヤート）で行われた国会議員選挙を微視的視点から観察し、選挙結果とその住民の解釈を照らし合わせ<sup>2</sup>、両者間にあるズレを指摘することで、分析上の注意点を喚起するだけでなく、共和国住民が置かれている政治状況と彼ら彼女らの解釈用語の限界を位置づけたいと考えている<sup>3</sup>。

## 2. 1998年ブリヤート国会議員選とセレンガ郡

1998年の春から夏にかけて、ブリヤート共和国は重要な選挙や国民投票が続いた。共和国の大統領選や国会(*Narodnyi Khural*)議員選、及び土地売買をめぐる国民投票が行われたわけだが、本論文で考察するのは、民族の下位概念であり「前近代的」紐帯とされている「氏族」<sup>4</sup>への帰属意識が、議員選での投票行動に影響を与えているかどうかである。

まずは議員選の総結果を見ておこう。議員選は、65の議席をめぐって389名の候補者によって争われた。6月21日の選挙で9名が当選、残りは7月5日の第二回選で決まった。こうして64の議席が決まり、1議席は第二回選をもってしても得票率が50%を越えず、選挙は成立しなかった(Nizhneangara 第30選挙区)。女性候補者69名より3名が当選を果た

---

<sup>2</sup> 近年の人類学のなかで選挙を扱ったものとして Eickelman [1986]がある。これは、どちらかと言えば、地域研究のようにマクロな観点からによるもので、ここでの私の関心と交差しない。

<sup>3</sup> 文献註記のないデータは、ブリヤート共和国セレンガ郡(*Selenginskii raion*)で1996年から1998年にかけて断続的に計12ヶ月間おこなった現地調査に基づいている。調査にあたっては、当該年度の文部省科学研究費補助金の一部を利用した。セレンガ郡で集約的に調査を行ったのは Tokhoi 村、Zurgan-Debe 村、Nur-Tukhum 村の3つである。それぞれ順に、Zagustai、Noekhon、Ubur-Dzokoi 村行政区(*sel'skaia administratsiia*)に属する。本論文が主に扱う Ubur-Dzokoi 村行政区には Nur-Tukhum 村以外に、Deben 村と Enkhor 村が属す。民族構成で言えば、Tokhoi 村(3,152名、1996年現在)はブリヤートとロシア人が半々を占め、Zurgan-Debe 村と Nur-Tukhum 村はブリヤートが95%以上占めている(人口は順に、1,299名、97年、805名、98年現在)。

<sup>4</sup> ここで言う「氏族」とはロシア語の *rod*、或いはブリヤート語の *iahan*、*esege* である。これがクランやリネージュに相当するものかどうかは疑念の余地があるが、本論文では深く問わない。ロシア革命前のブリヤートに於ける氏族概念をめぐっては、拙稿[n.d.]を参照。

した。議員の多くが、選挙連盟「我らがブリヤーチア[Nasha Buriatiia]」を通して勝利を収めた<sup>5</sup>。

民族構成は、当選した議員のうちブリヤートが 40%であり、ロシア人は 37%であった。前回の議員選挙では、ブリヤートが 42%、ロシア人が 56%を占めていた[Abaeva and Tsyrenov, 1999, p.27; Abaeva and Krianev, 1994, p.11]。いずれにせよ、ブリヤート 29%、ロシア人 67%という共和国住民の民族構成（1994 年のデータ）を勘案すれば、共和国に名称を与えている基幹民族のブリヤートの代表率は決して低くないと言ってよい<sup>6</sup>。職業構成で言えば、当選した議員のうち、10 名が企業家や株式会社社長、12 名が個人企業の支配人、2 名が銀行家、5 名が農村企業の代表、12 名が郡長あるいはその次官、10 名が公務員、5 名が学識関係者であり、小中学校校長とジャーナリストがそれぞれ 2 名、教師・医長・労働者が 1 名ずつであった<sup>7</sup>。

それでは、私の調査地を例に、細かく見ていこう。Nur-Tukhum の選挙詰所を含む Selenduma 第 34 選挙区<sup>8</sup>に於ける議員選挙は、セレンガ郡郡長バドマーエフ、有限株式会社「Ünder<sup>9</sup>」の社長ムンクーエフ、木材加工社社長「Zabaikalles」の社長ダシイーエフの三者によって争われた。生地は順に Noekhon、Tsaidam (Gusinoe 湖南の小村)、Enkhor である。Ubur-Dzokoi 村行政区の役所と「Erdem<sup>10</sup>」コルホーズ事務所の所在地である Nur-Tukhum は、Enkhor がダシイーエフの生地であったゆえ、バドマーエフ派の攻勢が目覚ましかった。バドマーエフはセレンガ郡郡長という地位を生かし、補助金の分配（例えば栄養不足の児童がいる家庭に対する援助金と小麦粉の配送など。これはセレンガ郡庁社会保障課から供給）、児童の健康診断などを繰り広げた。なお、バドマーエフ、ダシイーエフ、ムンクーエフ候補は全てブリヤートである。

バドマーエフ陣営は投票日を 10 日後に控えた 6 月 11 日、Nur-Tukhum で選挙演説を同小中学校で行った。演説の内容と住民の反応は、投票行動にどのような社会的意味づけがなされているかを理解するためにも、記しておく必要があるだろう。この選挙演説にしても郡長の地位を最大限に利用したもので、セレンガ郡文化課主任と教育課主任が伴い、文化課主任は民俗アンサンブル集団（「赤いセレンガ」）を引き連れてきていた。「美しく、住み心地の良い『Erdem』村のみなさん」<sup>11</sup>との挨拶から始まり、歌や踊りのコンサートが続い

<sup>5</sup> "Izbrany deputatami Narodnogo Khurala," *Buriatiia*, 98-VII-8; Vladimir Anishchenko, "Novyi sostav Khurala," *Selenga*, 98-VII-24.ブリヤーチアの政党や政治団体については別稿を準備したい。

<sup>6</sup> ちなみに郡長レベルでは、半数がブリヤートである。注記しておくべきなのは、ロシア人人口が優勢なものにも拘わらず、バルグジン、バウント、ジダ、セヴェロバイカリエ郡ではブリヤートが郡長に選出されている点である[Abaeva and Tsyrenov, 1999, p.27]。とはいえ、これでも代表数が少ないと考えるブリヤートも存在する。

<sup>7</sup> V. Safronov, "Khural, kakim on stal i pochemu?" *Selenga*, 98-VIII-21.

<sup>8</sup> Seleundma 第 34 選挙区は全部で 23 の選挙詰所から成り立っている。なお、地図を拙稿[2000b, pp.194f.] 或いは[2000e, p.29]で参照されたい。

<sup>9</sup> ブリヤート語で「高さ、高いこと」の意味。

<sup>10</sup> ブリヤート語で「科学、学問」の意味。

<sup>11</sup> コルホーズの名称が村の名として用いられる背景については拙稿[2000e, p.38]を見よ。

た。バドマーエフが少々遅れて到着したのを受けて教育課主任が、次のように挨拶をした。

【#1】先日、教育関係者の会議で誰を支持するかを話し合いました。バドマーエフ氏は教育向上を目指しております。おかげで今や、どの村の学校も、自分のマイクロバスをもつようになりました。幼稚園のため新しく建物を建てることも決定しました<sup>12</sup>。私は Nur-Tukhum を第二の故郷だと思っております。この選挙区には 3 人の候補者がいますが、[バドマーエフ氏を除く]2 人はウラン＝ウデに住んでおります。

次に、民俗アンサンブル団体が挨拶を行った。

【#2】私がバドマーエフ氏を支持するのも、障害者を援助してくれるからです。Erdem では病院が運営されている、と言うとまわりから驚かれるくらいです。これは大きな援助です。だからバドマーエフ氏には感謝しております。今では学校にバスがあるほどです。生活は苦しいですし、砂糖がない日もあります。パンが、本当の援助が必要なんです。バドマーエフ氏は一度たりとも私たちの願いや要求を断りませんでした。

この後、数人が学校やコルホーズへのバドマーエフの援助について述べ、村人からの質疑に移った。質疑の内容は、客観的に見て、バドマーエフを批判する傾向にあった。例えば、家が火事になり焼き出された老人は「あちこちに請願したけれど、『あなたはコルホーズ員ではない』と言われて断られた。私は 32 年も働いていたのだ。どうして願いを聞いてくれなかったのだ。あちこちたらい回しされただけだった…」と語った。これに対し、教育課主任がバドマーエフをフォローしたが、聴衆からは「そんな理由、分からないわ」とさらに発言が出た。また別の村人が、「アジテーションをするつもりはありません。しかし私もホワイトハウス<sup>13</sup>に行ったとき、たらい回しにされました。病気をしたので請願したのですけど…。児童保障基金はどこに行ったのかと質問したいです」と涙を流しながら語った。

村人の質疑が終わるとバドマーエフ自身が最後に締めくくりの挨拶を行った。だいたい次のような内容である。

【#3】[質疑に答えた後で。]もちろん私は援助します。みなさんはポターポフ氏<sup>14</sup>を批判していますが、どうしてこういうことになったのでしょうか。新聞やラジオ、テレビを見て批判しているのですが、実際の生活を見なくてははいけません。私には、自分の力が及ぶ限り、人々を助ける義務があります。現在の危機を脱出するには、国民が発展しなくてははいけませ

<sup>12</sup> Nur-Tukhum の幼稚園校舎は全焼し、運営されていない。

<sup>13</sup> Rus. “Belyi dom”でセレンガ郡庁を指す。建物が白いからである。

<sup>14</sup> 現ブリヤート共和国大統領。バドマーエフとポターポフとは政治的結びつきが強いと言われている。

んし、農村経済への郡の援助が不可欠です。コルホーズもソフホーズも援助金に依存してま  
すから。「カール・マルクス」<sup>15</sup>が成功しているのも、村長とコルホーズ議長のおかげです。  
文化について言えば、「文化の家」を再開させます。そのうち KSK<sup>16</sup>に発展させます。こうし  
たプランは医療についても言えます…。

以上のやりとりから明らかな様に、国会議員選挙の際に村レベルで具体的な争点となる  
のは、候補者がどれだけ選挙民及び社会組織（コルホーズや村行政区）に援助できるかだ  
る。逆に、村行政役所といった公的機関は、外部からの援助金がなければ日ごろの公務  
を執行できない現状にある。表 1 は 1997 年の Ubur-Dzokoi 村行政の収支を表しているが、  
歳入の 97%が郡からの資金に依存している。コルホーズにしても、あるコルホーズ員が  
語っていた様に、「バドマーエフはいつも私たちを助けてくれる。だから、こんな時 [=選  
挙の時] に知らん振りをすることはできない」となるわけである (cf. #3 の語り)。あまり  
に象徴的と言えるのは、選挙演説が終わると、スイスからの人道援助物資（衣類）が渡さ  
れたことであった。そして結果的に、バドマーエフは表 2 にあるように勝利した。当選し  
た全議員のうち 19%が郡長或いは次官だった事実は、こうしてみると、より良く理解でき  
よう。

表 1 Ubur-Dzokoi 村行政 1997 年収支

(単位=1,000 ループリ)

歳入		歳出	
所得税	2,800	公益事業	64,268
土地税	4,966	初等学校関係	137,957
資産・少数家庭税	731	中央簿記局関係	26,988
国家手数料	252	図書館関係	21,112
郡予算からの資金	412,395	クラブ関係	55,598
前年度残金	62	国家管理局・社会保障関係	105,196
		その他	10,087
合計	421,206	合計	421,206

(註)歳出のほとんどは、公務員に対する給料を占める。「国家管理局・社会保障関  
係」は、主任会計士以外の村行政区員（村行政区長含む）への給料が 80%を占め、  
残りは年金や児童手当、単身生活者や稼ぎ手を失った家庭手当などに割り当てら  
れている。予算執行は柔軟性があり、*surkharbaan* といった儀礼・行事には「クラ  
ブ」の項目からのみならず、「社会保障関係」からも出費される。

(出典)Ubur-Dzokoi 村行政区役所保管の”Otchet ob ispolnenii biudzheta za chetvertyi  
kvartal 1997 g.”より筆写。

<sup>15</sup> セレンガ郡 Tashir にあるコルホーズ。Tashir 村は Selenduma 選挙区のうちの一つにあたる。

<sup>16</sup> 「文化・スポーツ複合施設[kul'turno-sportivnyi kompleks]」を指し、「文化の家」の発展形態。Nur-Tukhum  
村の「文化の家」は廃墟と化しているのが現状である。

表 2 Selenduma 第 34 選挙区に於ける国会議員選の結果 (1998 年)

	得票数	比率
N. D. バドマーエフ	2,581	55.04%
G. D. ダシイーエフ	1,188	25.33%
A. R. ムンクーエフ	423	9.02%
全員に反対	-	-

(出典)公式発表、*Buriatiia*, 98-VII-8、及び訂正記事、*Selenga*,98-VII-24.

(註)*Buriatiia*, 98-VI-26 にある第 1 回公式発表では、バドマーエフの獲得票数が 3,443 (49.7%) であり、ダシイーエフは 1,668 (24.1%) であることに注意されたい。もし事情がこうであれば、過半数を獲得していないため、他の幾つかの選挙区と同様、第二回選が行われたはずである。

次に示す表 3 は、Seleundma 第 34 選挙区のうち、6 つの村 (=選挙詰所[*izbiratel'nyi uchastok*]) の選挙結果に関するものである。まずは、立候補者にとって地元が多く票獲得の選挙地域になっていることが明らかに読みとれる。ダシイーエフはその生地 Enkhor で、バドマーエフは Zurdan-Debe で圧倒的多数をそれぞれ獲得している。Zurgan-Debe とは地理的にも近く、同じ Noekhon 村行政区 (=「第 20 回党大会」コルホーズ) に属する Zala でもバドマーエフは圧倒的に優勢である。住民にとってこれは至極当然のことであり、一種の「反逆者」の事例はすぐさま注目の的になる。「Noekhon ではダシイーエフに 3 票、Enkhor ではバドマーエフに 3 票だった。3 対 3 だわね (笑)」、といった具合である。

表 3 Selenduma 第 34 選挙区の 6 村に於ける国会議員選の結果 (1998 年)

	Nur-Tukhum		Enkhor		Deben		Tashir	Zurgan-Debe	Zala
バドマーエフ	138	48%	3	0%	64	82%	286	534	「残り」
ダシイーエフ	125	43%	91	97%	14	18%	121	3	0
ムンクーエフ	6	0%	0	0%	0	0%	19	n.d.	1
全員に反対	4	0%	0	0%	0	0%	n.d.	n.d.	n.d.
無効票数	15	0%	0	0%	0	0%	n.d.	n.d.	n.d.
投票者数	288	63%	94	80%	78	83%	n.d.	n.d.	n.d.
登録者数	460		117		94		n.d.	n.d.	n.d.

(出典)筆者調査。

(註)これは Nur-Tukhum 選挙詰所 No. 34/533 で、私が計算したものである。開票作業を手伝いながら Nur-Tukhum での選挙結果を、選挙管理人とともに確認しながら記した。しかし、これらは選挙中央管理局への最終報告のデータではない。Nur-Tukhum 以外の村のデータ全ては、詰所に駆けつけた村人が他村の結果も知りたがって各地の選挙詰所に電話して聞き、それを私が書き留めたものであり、極めて断片的である。

同じ村行政区=コルホーズに属していながらも、Ubur-Dzokoi の 3 つの村、Nur-Tukhum、Deben、Enkhor とでは投票行動に大きな差が認められる。Nur-Tukhum ではバドマーエフとダシイーエフが票をほぼ折半しているのに対し、Deben ではバドマーエフが、Enkhor ではダシイーエフが突出している。ここで問題となるのは、このように村内部で分裂した選挙

結果を村人がどう解釈するかである。

### 3. 住民による選挙結果の説明

Enkhor 出身であるがいまは Nur-Tukhum に住む女性がダシーエフ支持の理由を聞かれたとき、「だって彼は Enkhor 出身じゃないの」と簡潔に答えたのは、同じ郷土であることを重視する立場だからであり、地元尊重というこの解釈に特別の説明は要しまい。実際、上で見た#1 の選挙応援演説で、「第二の故郷」と Nur-Tukhum 村が言及され、バドマーエフ以外の候補がウラン=ウデに住んでいる事実が強調されていた。同じ故郷(Bur. *toonto niutag*)をもつことの意味は、社会的にも文化的にもブリヤートにとって大きいものである [cf. 渡邊 2000e]。議論すべきなのは、住民にとって容易に受容されるこのような解釈のほうではなく、住民が有する知識の量の濃淡がはっきり存在することから生じる、より秘密的な解釈のほうである。「氏族」をめぐる解釈がそれである。

ブリヤート民族誌の著者 Caroline Humphrey は、ソ連時代よりも父系氏族が重要になってきたとするブリヤートの語りを紹介し、選挙のときに氏族が投票ブロックにもなると記し、ただしこの手の話は彼女の調査地であるバルグジン郡とセレンガ郡とでは耳にしなかった、と注意書きしている [Humphrey, 1998, p.483; p.560, n.2]。「氏族」かどうかは別としても、次の二つの語りは、選挙と下位民族集団への帰属意識との関連性を指摘しているかに読める。

【#4】ブリヤート共和国のある郡で。

「1994年での[議員]選挙のとき、ブリヤートのある選挙区で、自分の出身地にもかかわらず反対票を少なからず生じさせた候補者がいた。この不都合な事態について彼は選挙後、『ロシア人と *khodor* が反対に投じた』という発言をしたのだ。ブリヤートはイルクーツクとブリヤートに分かれたからだ。『他人は他人』というのが彼の人付き合いなんだ。まづいよな。私は始めのうちは、彼を支持してたんだけど、これを聞いてからはやめたよ。」

【#5】コルホーズと学校の現状に関する会話のなかで。Nur-Tukhum にて。

H.W. 「Ubur-Dzokoi はどのようにすれば、危機的な状況を克服することができるんでしょうね。」

A 「良くはならんよ。これは心理の問題なんだ。Tokhoi とか Noekhon は一つと考えられている。Tokhoi だとロシア人もいるけど、ロシア人はロシア人で一つになっている。でも Ubur-Dzokoi には 4 つの氏族がいるんだ。この氏族は昔、衝突していた。ソ連時代ならばコルホーズがあったけど今はない。氏族については、ふだんなら語られないけど、危機的で批判的な契機のとくに言われるんだ。おまえもこういう時を観察しなくちゃいかんよ。例えば選挙のときがそうだった。だってダシーエフは Enkhor の Kharanut 氏族だったからな。」

語り#4 での *khodor* というのは、上の発言では「イルクーツク・ブリヤート」とほぼ同じ意味で用いられているが、必ずしも西ブリヤートと同じではない。*khodor buriaaduud*、あるいはロシア語風に *khderiatki* とは、西ブリヤートの一部を指す集団名称で<sup>17</sup>、東ブリヤートのみならず西ブリヤートのなかでも弁別され、否定的・批判的文脈で用いられ、多くは「ずるがしこく、けちな性格の持ち主」というニュアンスを帯びている。ブリヤートかロシア人かという民族を規準とした他者の範疇化のみならず、ブリヤートの下位集団である西／東ブリヤートという弁別がこの語りにも影響を及ぼしている<sup>18</sup>。

語り#5 では、明らかに、Ubur-Dzokoi に於ける諸集団の弁別が語られている。確かに、Nur-Tukhum および Deben と Enkhor は、別個に *oboo* 儀礼を執り行う、かつては参拝する仏教寺院(*datsan*)が違っていた、墓を別々にもつ、ブリヤート語方言が少々異なる[cf. 渡邊、2000a]、児童の進路に違いがみられるなどで、互いに異なっている。便宜的に村の「氏族」構成を図示したのが表4である。#5 の話者が念頭においている Ubur-Dzokoi の「4つの氏族」とは、Nur-Tukhum と Deben の Tabangut (特に I)、そして Enkhor の Uzon、Kharanut、Khatigan であるが、これが一致するのは当然で、Enkhor の「氏族」の構成を私に知らせたのが他ならぬ彼だったからである。

表4 ブリヤート「氏族」の構成

Zurgan-Debe	Nur-Tukhum	Deben	Enkhor
Tsongol	Tabangut (I, I, III)	Tabangut (I, II, III)	Uzon Kharanut Khatigan
	‘Tsongol’		

(出典)渡邊 [2000a、 pp. 64ff.]より作成。

これまでの叙述からは、ダシーエフへの投票率の村別の格差を見て論じられるように、「氏族」への帰属によって議員選の投票行動が変わると、それこそ集票マシーンとしての「氏族」像を描きながら、説明してもよいように見える。この説明図式は言うまでもなく、儀礼・墓・宗教・教育そして地方政治などの分野をまたがって村落＝氏族共同体が齊一に機能するという全的共同性のモデルの1バリエーションである[cf. Watanabe, 2000d]。だがリアリティは、より複雑かつ多層的である。

なるほど、幸か不幸か私は、「氏族について語られる」「[民族誌家として]観察しなくて

<sup>17</sup> *khodor* はもともと魚に関する崇拝を意味していたらしい[Abaeva, personal communication]。

はいけない」「危機的で批判的な」場面に出くわすことがなかった。しかし「氏族」に関する質問は常に、困難さを伴っていた、と論じることができる。というのも、Nur-Tukhumの住民の多くが「氏族」については知らず、相異なった自己呈示をしてきたからである。「我々は Tabangut だ。Deben や Enkhor については分からない」と言う者もいれば、一方で「Nur-Tukhum の我々は Tsongol だ」と言う者もあり、表4にあるような詳しい説明を述べて「Nur-Tukhum に Tsongol はいない。いるにしても移住してきた人で、少数だ」と言う者がいる。量的データを私は持ち合わせていないが、このなかの説明のうち、第二の「Nur-Tukhum の我々は Tsongol だ」とする人が一番多かった。

Tsongol は、「基本的には」<sup>19</sup>、Noekhon、Murochi、Bol'shoi lug などの村に住む。だが Nur-Tukhum の住民はこの第二の自己呈示をする。というのも、彼ら彼女らはツォンゴル方言を話し、この方言の話者という観点から「我々 Tsongol」というアイデンティティを語るからである[渡邊, 2000a; 2000b]。いずれにせよこう主張する者は、Tsongol という「氏族」のアイデンティティを有してはいる。とすると、仮に「氏族」帰属が投票行動とリンクするという説明がリアリティに即しているならば、「生粋の Tsongol が住む」Zurgan-Debe と Nur-Tukhum との投票結果が同じにならなければならないが、しかし実際は、そうはなっていないのである。

「氏族」に依拠した全的共同性のモデルが説明不可能性に陥るのは、上記の如き現象の複雑さゆえだけではない。言説と行為との混同もその理由の一つとして挙げて良い。つまり、#4 や #5 の事例は文字通り住民の語り、それも、ある事態（この場合ならば選挙結果が明らかになった状況）が生じたあとでの **ex post** な言説である。民族や「氏族」への帰属がある行為を規定するのではなく、ある行為が生じた場合、それを事後的に解釈したり説明したりする時に、民族<sup>20</sup>や「氏族」が語られるのである。#4 の話者は、民族的言説で自分の選挙結果を解釈する立候補者は民主的ではないと判断しているのであり、一方で、#5 の話者は、Ubur-Dzokoi という生活空間内部の亀裂を「氏族」の違いで解釈しているというわけである。ポストソ連になってからの、メディアに於ける民族的言説の広範囲な流布を考慮すれば[cf. Watanabe, 1998; 2000c]、出来事の解釈図式それ自体も、すでにそのなかに組み込まれていると言えよう。

## 結語

本論文はこれまで、セレンガ郡 Nur-Tukhum 村を例にとり、ブリヤート国会議員選の

---

<sup>18</sup> ブリヤートの西／東という弁別については、拙稿[1997, pp.122ff.]を見よ。

<sup>19</sup> ここで括弧が付くのは、客観的な研究者の立場から記述すると、という意味が込められるからである。

<sup>20</sup> ソ連の解体後、「民族」が学術用語として分析されるというよりは、社会・政治問題への対処療法的解釈術語として使われるようになった理論的背景については、拙稿[2001, Sec. 4]を見よ。

過程と、その結果に関する住民の解釈に対して微視的検討を加えてきた。いま明らかになったのは次の二点であろう。

第一に、個人レベルでは請願の受理が、組織レベルでは補助金分配能力が、議員選挙の大きな争点になっているということである。立候補者が同じ地元の人間かどうか強調されるのも、その方が個人的ネットワークを通して一種のパトロン=クライアント関係を構築しやすいからに他ならない。もちろんこれは一般的な原理であって、実際の選挙結果は多様なものとなる。

第二に、選挙結果が多様で村を二分するようなものになったとき、それを説明する術語として民族や「氏族」が用いられる傾向にある。繰り返し論じれば、同じ民族や「氏族」に帰属しているが故にある行為（投票）をくりひろげるのではなく、同一の枠組(選挙区)で弁別的指標が見つかった時に、民族や「氏族」の多元的構成に言及される、ということである。行為がアナクロニズムで伝統主義的なのではなく、行為を説明する際の言説の準拠枠が「前近代的」で「非合理的」なものとなっている。このことを混同してしまうと、リアリティの把握は困難になるだろう。

言うまでもなく、選挙結果をめぐる言説は以上のようなものばかりではない。あるジャーナリストは次のような趣旨のことを述べているが、これは民族的・「氏族」的解釈のものとは全く別である。

当選した議員の 86%が社会的に高い地位にあり高額な給料をもらっている。国会には、矛盾を抱えた我々の社会のあらゆる層が代表されるべきであった。これでは国会は、人民のものではなくて官僚のものであり、高圧的な商人のものである。我々はこんな風に、餌ほしさに票を売ること、自らを、子どもたちの未来を、自分の祖国を売っているのだ。<sup>21</sup>

ここで言われている「餌」が、広義の補助金や個人的援助を指していることは言を俟たないだろう。村の住民にしてもこうした事情を十二分に理解している。にもかかわらず、#5のような語りも登場するのは、セレンガ・ブリヤートが他の解釈図式を持ち合わせていないからであり、まさにこの点に彼ら彼女らが置かれている政治空間の限界が観察できるのである。

#5の「氏族は昔、衝突していた。ソ連時代ならばコルホーズがあったけど今はない」というくだりには、多くの含意がある。コルホーズが根本的な再編のプロセスを経て、事実上機能不全になっている現在、それに代わる新たな組織の統合原理はまだ獲得されていない<sup>22</sup>。同時に、様々なメディアで民族や「氏族」が言及されるようになっている現在、政治社会について語る新しい枠組もまだ整備されていない。そのため、<コルホーズによる

<sup>21</sup> V. Safronov, "Khural, kakim on stal i pochemu?" *Selenga*, 98-VIII-21.

<sup>22</sup> サハ共和国（ヤクーチア）でソフホーズの再編後に生まれたある事業体に「遊牧氏族共同体」という名称がつけられたが、じつのところそれは「氏族」を基盤としたものではない[高倉, 2000, p.214].

統合→「氏族」による分裂>という民俗モデルが極めて分かりやすくなっているのである。こうしてみると、広い意味での民主化に向けてのテイク＝オフには、制度的基盤の再編のみならず、言説環境の再構築もまた不可欠なものとなってくるだろう<sup>23</sup>。

## [参考文献]

- Abaeva, L. L., and B. P. Krianev [1994] *Sotsial'no-politologicheskii analiz vyborov v Respublike Buriatiia*, Issledovania po prikladnoi i neotlozhnoi etnologii, No. 69, Moskva: IEA RAN.
- Abaeva, Liubov', and Sogto Tsyrenov [1999] *Respublika Buriatiia: model' etnologicheskogo monitoringa*, Moskva: IEA RAN.
- Cohen, Abner [1969] "Political Anthropology: The Analysis of the Symbolism of Power Relations," *Man (n.s.)*, 4(2): 215-235.
- \_\_\_\_\_ [1974a] *Two-Dimensional Man: An Essay on the Anthropology of Power and Symbolism in Complex Society*, Berkeley: University of California Press.
- \_\_\_\_\_ [1974b] "Introduction: The Lesson of Ethnicity," in: id., ed., *Urban Ethnicity*, London: Tavistock Publications, pp. ix-xxiv.
- Eickelman, Dale F. [1986] "Royal Authority and Religious Legitimacy: Morocco's Elections, 1960-1984," in: Myron J. Aronoff, ed., *The Frailty of Authority*, Political Anthropology, Vol. V, Oxford: Transaction Books, pp. 181-205.
- Fried, Morton H. [1967] *The Evolution of Political Society: An Essay in Political Anthropology*, New York: Random House.
- \_\_\_\_\_ [1975] "The Myth of Tribe," *Natural History*, 84: 12-20.
- Humphrey, Caroline [1998] *Marx Went Away-But Karl Stayed Behind*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Lewellen, Ted C. [1992] *Political Anthropology: An Introduction*, Second Edition, Westport: Bergin & Garvey.
- 高倉浩樹[2000]『社会主義の民族誌 — シベリア・トナカイ飼育の風景』東京: 東京都立大学出版会。
- 渡邊日日(Watanabe, Hibi) [1997] 「民族の解釈学へのプロレゴメナーセレンガ・ブリヤー ト,1996」井上紘一編『民族の共存を求めて』第 2 巻, 札幌: 北海道大学スラブ研究センター,106-153 頁。
- \_\_\_\_\_ [1998] "The Triad of Post-Socialism, Post-Colonialism, and Postmodernism?:"

---

<sup>23</sup> 本論文は、トヨタ財団 1999 年度研究助成 (99-A-256)、及び日本学術振興会特別研究員制度を通じた 2000 年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。

Fragmentary Memoranda from Southern Siberia," *Anthropology of East Europe Review*, 16(2): 103-108.

\_\_\_\_\_ [1999] 「ソヴィエト民族文化の形成とその効果 — 『民族』 学的知識から知識の人類学へ」 望月哲男・宇山智彦編『旧ソ連・東欧諸国の 20 世紀文化を考える』札幌: 北海道大学スラブ研究センター, 1-31 頁。

\_\_\_\_\_ [2000a] 「多民族状況に於けるセレンガ・ブリヤートの親族名称の『体系』について」『内陸アジア史研究』 15: 61-84 頁。

\_\_\_\_\_ [2000b] 「民族的言語行為のジレンマ — ロシア・ブリヤーチアにみえる多言語使用とエスニシティ」『ことばと社会』 3, 三元社, 187-209 頁。

\_\_\_\_\_ [2000c] 「学校のなかの民族文化 — ロシア連邦ブリヤート共和国から」『Arctic Circle』, 網走: 北海道立北方民族博物館, 35: 8-9.

\_\_\_\_\_ [2000d] "Having Lived the Culture the Soviet Way: On Aspects of the Socialist Modernisation among the Selenga Buriats," *Interdisciplinary Cultural Studies*, The University of Tokyo, 5: 134-150.

\_\_\_\_\_ [2000e] 「所有構造の変容と集団主義の軌跡 — 民営化過程におけるロシア連邦ブリヤート共和国のコルホーズについて」『アジア経済』 41(8): 20-56.

\_\_\_\_\_ [2001] 「ロシア・ソヴィエト民族理論点描 — 人類学的対象の再構成のために」, 早稲田大学文化人類学会第 2 回総会研究発表, 於 早稲田大学, 提出論文, 全 15 頁。

\_\_\_\_\_ [n.d.] "On Social Dynamics of Clan Society and Ethnographic Discourses on Its Realities: The Buriats, Colonial Administration and Revolutionary Ideals in Tsarist Siberia," 井上絢一編『社会人類学からみた北方ユーラシア世界』, 札幌: 北海道大学スラブ研究センター。

<新聞> *Buriatiia*, Ulan-Ude; *Selenga*, Gusinozersk. (*Buriatiia* 紙は <http://www.buryatia.ru/newspaper/burpap/index.htm> で閲覧可能。)